

法の水琴

大正大学講師 高橋 秀城

(74)

八大竜王

雨やめたまへ

七月は異常気象の連続でした。とりわけ台風七号が引き金となった大雨は、西日本全域に甚大な被害をもたらしました。まずは豪雨により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。ともに、一刻も早い復旧をお祈り申し上げます。

さらに中旬からは猛暑が続いています。二十三日の「大暑」の日には、埼玉県熊谷市で四十一度という国内最高気温を記録しました。気象庁からは「命に関わる危険な暑さ」との警告も出されています。暦の上では八月七日に「立秋」を迎えますが、今しばらくは、熱中症への万全の対策をお願いいたします。

時により
すぐれば民の
嘆きなり

（源実朝『金槐和歌集』）
（ありがたい恵みの雨も、時によつて降りすぎると民衆の悲しみになります。八大竜王よ、どうか雨を止めてください。）
これは、鎌倉幕府三代将軍となった源実朝（一一九二―一二二九）の家集『金槐和歌集』の最後を飾る和歌です。今から八百年ほど前の建暦元年（一一二二）七月、鎌倉は大雨に見舞われ、天空に満つるほどの洪水に遭いました。弱冠二十歳の実朝は、民の嘆き悲しみに対して、一人本尊の御前に座つて祈りを捧げています。

八大竜王は、航海の守護神や雨乞いの本尊です。海や雨を支配するところから、実朝は雨止み

（日乞い）を祈願したのでしよう。歌の上の句で、雨も度を越えると「無情の雨」となることを示し、下の句ではその思いを八大竜王に訴えかけています。

実朝は、若き日から『新古今和歌集』の撰者としても著名な藤原定家（一一六二―一二四一）から、
詞は古きを慕ひ、
心は新しきを求め、
及ばぬ高き姿を願ひて
（近代秀歌）
という和歌の手ほどきを受けていました。この歌には、和歌の高みを目指していた歌人としての姿勢と、理想の国を思い描いて神仏に対峙し、心の内を強ひ願いを堂々と申し述べた為政者としての姿を見ることができるとしよう。

ところで、太宰治（一九〇九―一九四八）に『右大臣実朝』という小説があります。そこには、実朝が藤原定家に学んで「古今独歩の大歌人」

となったことに加えて、大雨のあつた建暦元年十月に鴨長明（一一五五―一二二六）と対面して「和歌の奥儀を感得」したことも語られています。鴨長明の代表作『方丈記』には、養和元年（一一八一）に発生した大飢饉（養和の飢饉）に触れる中で、「ある年には春と夏に干ばつ、ある年には秋と冬に大風や洪水などの良くないことが続いて、穀物が全て実らない」と記されています。実朝との面会の際にも、和歌とともに、こうした自然災害について話題に上つたでしようか。

『方丈記』では、実際に目の当たりにした大・辻風、遷都、飢饉、地震という災害（五大災）を書き留めつつ、この世の「人と栖（住居）の無常」を語っています。例えば、冒頭の序章には次のように見えます。

寶石を敷き詰めたように美しい都の中で、棟（建物）を並べ、屋根の高さを競っている、身分の高い者や、低い者の住まいは、時代を経ても無くならいものだが、これは本當



雨乞いの本尊である八大龍王像

折り折りの記 (108)

鶏飼わぬ里に貰ひし酔芙蓉

波多野 重雄

高尾山の一号路を旧暦六月二十三日（八王子城落城の日）城見台に遙かなる八王子城址を望む。前田上杉軍に落城したわが八王子城主の弟、奇居城主氏邦の侍大導寺が恩方の八王子城の搦手から前田軍の路案内をし、執拗に攻撃した。その功を小田原の秀吉の陣に報告。秀吉は激怒し、大導寺を逆臣として打首とした物語を思ひ出した。昔から恩方地区は鶏を飼ってはならない「掟」を思ひ出した。戦後焼野原の復興に果した地域森林の恩恵を酔芙蓉の変化に重ね見る想いだつた。

（高尾山健康登山の会々々長）

厚木市 荒井 一雄

琵琶滝

護身切九字

唱真言入滝
水圧制呼吸
八九分出滝

火の仏
お不動様によりすがり
生くるも死すも未練のこさず
『護身法』をし、『九字』を切る…
不動真言を唱へながら滝に入る…
水圧が思ひのほか呼吸を制動し、
もの八、九分にて
たちまち滝より飛び出す…

にそうかと調べてみると、昔から存在していた家といふのは極めて少ない。あるものは去年焼けてしまつて、今年造つたものである。あるものは大きな家が落ちてぶれてしまつて、小さな家となつてしまつて、小さな家に住む人もこれと同じである。場所も変わらなう人も多ければ、私たちが昔会つたことのある人は、二、三十人のうちにわずかに一人か二人くらいである。朝に人が死に、夕方に人が生まれるという世の定めは、ちよつと消えたり現れたりという水の泡に似ている。

（方丈記「序章」）
長明は、一見何も変わらないように見える住まいも、よくよく観察してみると変化しており、それは人の生死にも同様に見出されると語っています。水の泡が、二方では消え、一方では生まれる。ように、この世は「消滅」と「発生」（生成）とが繰り返されていきます。この「滅びを重視した無常観」は、あ

夏の高尾山に蓮の花咲く



本年も御書院前にて、蓮の花が咲いております。毎年七月中に咲き、訪れる御信徒や登山者の皆様様が写真を撮られております。

る意味で無常の本質を、分かりやすく説き明かしていると言えらるでしょう。ただし、こうした無常観は、この度の西日本豪雨のような災害の前にしては理解されないものかもしれません。一変してしまつた現実への嘆きを前に、私たちがどのような一歩を踏み出せば良いのでしよつか。

色も香も
むなしと説ける
法なれど
祈る験は
ありとこそ聞け

（金葉和歌集「藤原忠通」）
（色も香も儂いと説く仏法だけれど、祈る効き目があるかと聞くと）
この歌は、三日三晩止まなかつた大雨に対して、人々が「般若心経」を一心にお唱へした際に詠われたものです。国家の安寧と民の幸福を祈つた実朝のような、大きな志には及ばないながらも、無常の世に生きる多くの命に、ただひたすらに寄り添つていきたくと考えています。

（栃木北部教区普賢寺）